

博士(保健学)学位論文要旨

ACP(アドバンス・ケア・プランニング)の準備教育としての
デスカフェの可能性

Potential of Death Cafes as Preparatory Education for
Advance Care Planning

2024 年

指導教員 新開 省二 教授

2102101

萩原 真由美

HAGIWARA, Mayumi

女子栄養大学

[背景と目的]

我が国の年間死亡者数は毎年最高値を更新し、2022年には戦後最大の前年比増加数を記録した。その85%を80歳以上が占めており、慢性疾患を抱えて高齢になって亡くなる高齢者が増加し、終末期に入る前からのアドバンス・ケア・プランニング（Advance Care Planning：ACP）の必要性が高まっている。

しかし、国内におけるACPの認知度や実践意識は依然低く、前もって死の話をするなど「縁起でもない」とする社会全般的な意識や、明確に言葉にしない日本人の意思表示文化がACP促進の阻害要因に挙げられている。そこで、自発的に死を語る草の根ムーブメントとして広まったデスカフェが、これらの阻害要因を緩和し、ACPの準備教育になるのではないかという仮説の検証を本研究の目的とした。

[方法]

第1章では質的研究として、デスカフェに複数回参加経験のある24名を性・年齢を調整した4組に分けてフォーカスグループインタビューを行い、デスカフェ参加による生や死に対する考え方の変化を調べた。そして、その変化がACP実践につながる可能性を有しているのかどうか、生成されたカテゴリーやサブカテゴリーから詳細に検討を行った。

第2章は、第1章で得た検討の結果を検証するために、高齢化が著しい板橋区高島平団地地区に住むデスカフェ未経験の一般中高年者41名をⅡ群に分け、各5カ月間、月1回の継続的なデスカフェを行い、参加前後の精神的健康度や死生観、スピリチュアリティ、ACPの必要性に関する考え方や死に関する対話行動の変化を調べる介入研究を行った。そしてその変化がACPの実践を促進する可能性を検討した。

さらに第3章では、第2章で行った前半・後半合わせて10カ月にわた

るデスカフェのプロセス評価を行い、デスカフェ実践中に交わされた参加者の具体的な発言や、デスカフェ終了後の「思い」のどのようなところが第2章の結果と符号するのかを振り返り、デスカフェの持つACPの準備教育の可能性を支持しているかどうか検討した。

[結果]

第1章では、デスカフェ参加による生や死に対する考え方の変化として、【生について考えるようになった】【死について考えるようになった】【生や死について考えるのをやめた】という3つのカテゴリーが生成され、前二者はACPの準備教育としての機能を有するが、最後のカテゴリーはACPから乖離することが判明した。また、前二者も含めたほとんどの人が、ACPの本質は、終末期の医療やケアの選択に至る対話のプロセスにあることへの理解が不足していた。

第2章では、継続的なデスカフェへの参加により、死生観の2因子「解放としての死」「人生における目的意識」と、スピリチュアリティの2因子「生きる意味・目的」「他者との調和」に統計学的に有意な上昇が認められた。また、ACPが必要だという思いには統計的に有意な変化はなかったが、実際に死について周囲や家族と対話した人が増えていた。

第3章では、デスカフェにおける参加者の具体的な語りと、終了後の「思いの変化」と、第2章で得た結果との整合性が確認できた。

[考察]

第1章、第2章、第3章を通して、デスカフェはACPの準備教育になる可能性が確認できた。デスカフェを続けるほどACPから乖離してゆく人もごく一部いたが、9割以上の人はデスカフェで死までの生を見直し、必ずおとずれる死を受容して自分事として死について考えるようになっていた。この変化は、ACPの準備状況を促進していた。しかし、

ほとんどの人々はACPにおける対話プロセスの重要性が十分に理解できておらず、デスカフェだけではACPの推進には不完全であることも判明した。このことから、デスカフェでACP実践の準備状況を整え、同時に医療・介護の専門職によるACPへの正しい理解を進めることのできる協働プログラムの開発が望まれる。

[結論]

質的研究と量的研究の双方から「ACPの準備教育としてのデスカフェの可能性」が確認され、デスカフェにはACPの実践意識を高める機能があることが明らかになった。さらに、自発的に死を語るデスカフェが持つその準備教育機能を活かし、自発的なACPの実践を実現するために、デスカフェと医療・介護の専門職による協働の必要性が示された。